

ウッドショック禍の中、昔ながらの木造工法 忠岡の家



掛矢を使って“昔ながら”建て方作業風景



上: 追掛大柱継ぎ

下: 長ぼぞ込み柱



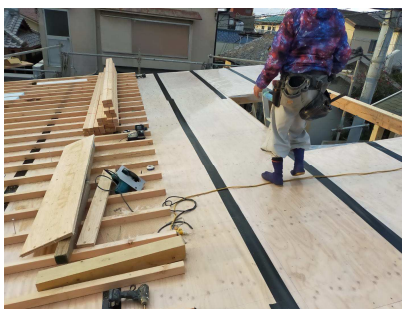
施工者：浦工務店 浦 烈晴

<https://urahouse.com/tadaoka>

2021 年ウッドショックで材料手配もままならずの真っ只中、新築住宅の依頼を受け、未だに“手刻み”に拘っている平戸生まれの大工・浦さんに相談すると“大丈夫！”の一言でスタートした。集成材+プレカット加工全盛の中、材料は吉野で手配し“追掛大柱”“長ぼぞ込み柱”等の継手、仕口は自前で加工する事になった。平屋建て、20 坪そこそこの規模ながら伝統工法による“昔ながらの住い”を泉州・忠岡に建てる事が出来た。

建築基準法の“道”が無い私道に面した敷地は、許可を取り、耐火性能を増して建蔽率の割り増しを得て、建築主の要望に応えた将来の身障時に考慮したプランになっている。

元々設計者にとって伝統工法は馴染みが深く、軒の深い設計が常ではあるが、今回は前述の如く敷地いっぱいに片流れ屋根の箱型建物ではあるが、断熱・気密性能については前回紹介した“南桜塚の家”同様に、“経験したことの無いであろう”手間の掛かる指示を現場で行い、性能の確保に努めている。



2重垂木断熱工法



外壁断熱+気密シート張

ウッドショック禍の中、昔ながらの木造工法 ……忠岡の家



上: 格子戸より中庭ポーチ～玄関を見る。



上: リビングより玄関(式台)を見る。

右: 玄関扉 取手の試作品

下: リビングダイニングキッチン



これまで通りの“伝統の良さ”＋“今時の性能確保”ならびに“建築に関わった職人さん達にも楽しんでもらえる”様な住まいを目指しているが、少し違った要素が今回加わった。実は、浦さんは“変木”使いで有名な大工さんであった。事あるごとにお勧めの提案があり、建築主も当初はNGで回答していたが、工事途中に見学に来られた友人から「浦さんに建ててもらっているなら浦さんのエッセンスを入れないと！」……。結果、吉野まで変木買いに行って、玄関式台は建築主の選定による。その他便所手洗いカウンターや手摺等にも銘木を使っている。最後に玄関扉の“取手”も 10 を超える試作品の提案を受けたが、これだけは私がNG。



上: 門扉代わりの格子戸

下: 私道に面した全景（許可を得て建築）

緩やかな吹抜けの片流れ天井まで吉野産杉無節赤身材の壁で仕上げた“木の香り”漂うLDK
そして、照明は建築主の要望によりLEDは一切使わずに“CCFL球”を使用している。

株式会社エーアンドシー設計 S/ISHIDA

<https://www.aandc.co.jp>